

▽紹介

## 沖電気、日本航空、日立における人間の尊厳のたたかい

——1970年代から1980年代の労働組合運動をになった世代

勝山 善介

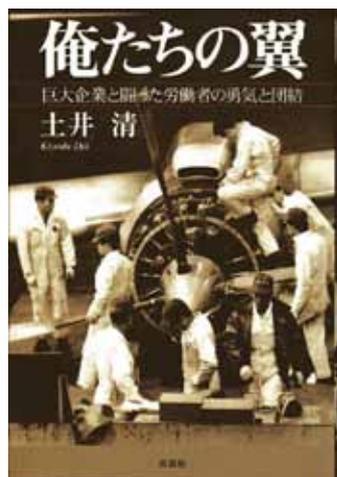
(2013.11.25+12.02)

このサイト（現代労働組合研究会のHP）では東京争議団、千代田総行動（のちに東京総行動）、総評全金の北辰電機などにかかわった人たちと労働組合を紹介してきた。

今回は社会の矛盾を肌身で感じて社会運動としての労働組合運動をになった人たちの本を3冊、ご案内する。



『たたかいと愛と、これからも——短編小説とルポでつづるふたりの五十年』（浅利勝美・浅利正著、一粒書房、2013年4月）



『俺たちの翼——巨大企業と闘った労働者の勇気と団結』（土井清著、文芸社、2003年4月）



『明日へのうた——語りつぐ日立争議』（戸塚章介、大月書店、2001年12月）

1冊目は『たたかいと愛と、これからも——短編小説とルポでつづるふたりの五十年』（浅利勝美・浅利正著、一粒書房、2013年4月）

1978年11月、沖電気で行った会社側の「企業競争に勝ち残れない」と、従業員の一割にあたる1500名の首切り合理化とつづく指名解雇事件があった。

当時の状況を今崎暁巳さんは『何をみつめて跳ぶのか——沖電気指名解雇をこえて』（労働旬報社、1980年）で、「血の入れ替えを行おうとする会社の姿とその若き労働者への指名解雇の姿」を描いた。

浅利正さん（1959年秋田県角館高校定時制卒）は職場の中から、争議を支援したことから仕事を干され、「仕事を取りもどす訴え」を東京都労働委員会に起こし、3年余にわたるたたか

いで仕事を取り戻した。

みずからもルポとして「小さな背中で見つづけたもの」などを書いている（初出は下記のルポ同人誌、本書所収）。

さらに浅利さんは“1978年秋、中央労働学院の「ルポルタージュ教室」に学んだ。その時の主任講師が今崎暁巳先生だった。その年の11月、私が勤める沖電気が大量の指名解雇を強行した。今崎教室の受講生で沖電気争議団の事務所を訪問取材し、教室終了後も勉強を続けようと「現代ルポルタージュ研究会」を設立。機関誌創刊号で「特集沖電気争議」を”発行し、同人メンバーと現在『たたかいのルポルタージュ』を15号（2011年）まで発行し続けている。

同誌の13号に浅利さんは「定年退職の日」（同書所収）を書き、そのあとがきに、私の大先輩の文が掲載されている。

筆者の「柳さん」は、先に紹介した『たたかいのルポルタージュ』編集長として尽力し、高度情報社会・大量消費社会・企業社会に振り回されない生き方を創造するために、文化・コミュニティ・人間としての絆づくりの視点から、一人ひとりに分け隔てなく、さまざまな編集プラン・企画・構成を語りつづけていた。

人間を人間らしく扱え・まともな労働を

柳沢 明朗

いわゆる「一人争議」として、このことを主張して差別され続けた浅利さんが、節を曲げずに誇り高い労働者の働き方を掲げきって定年退職を迎えた。人間の尊厳、人格の尊重を根底にすえた近代社会の人間関係、働き方、職場や労使関係を提起した労働人生の完結だった。

二〇世紀の価値観を時代と企業社会に打ちつづけた技術者・労働者魂を尊敬せざるを得ない。退職の日に出会う元同志。仲間もしたという同志が「裏切り」代価として得た出世。その管理者との出会いを淡々と描く退職の日に「ご苦労さん」と涙が滲んだ。なんという人生の違いだろうか。小倉さん〔小倉寛太郎＝「沈まぬ太陽」のモデル〕の場合も、働き手を分断していく資本の悪しき衝動の手先が登場するが、酷似した事実が湧く。

共通した点をもう一つみた。狂気のような異常な外地たらい回しの先々で、人の絆を作りサバナクラブなどで、仕事を起こしていく小倉さん。同じく流罪先の職場での「仕事をしないことが仕事」の仕打ちのなかで、技術者魂を発揮して、独学で身につけたパソコンを駆使して基板設計実績データの整備をする浅利さん。その五年が誇りだという。次の担当者に引き継ぐときの「浅利さんは天才だ」という継承者のコトバが、自己の技術・労働の主人公となって創造した働き方の評価を示す場面でうれしい。

小倉、浅利、松謙さん〔沖電気争議団事務局次長〕の三人の姿は、人生丸ごとをかけて、企業社会の論理に人間の論理を打ち込み、対峙したものだといえよう。これこそ、西ルポがいうように「近代の普遍的価値である人間の尊厳」の実現への挑戦にほかならない。

もともと「おれたちは奴隷ではない。人間だ」という権利主張が団結の土台だ、労働運動だと、

いわれ信じてきていた。英国で「組合を裏切ったことがあるか」と問われた、破廉恥な犯罪者が「オレはそれほどの悪人じゃねえ」といったという話を授業のなかで聞かされた。

この燃えるような権利感情に打たれて生涯を労働法を商売にして食ってきた。だから三人の生涯、価値観に感動し、励まされる。

仲間とともに生きる三人の人生・存在がなかったら、これらの問題提起や考え方、価値観が観念論、卓上の空想、願望になってしまうところだった。幸いなことに私は、夢のように描いていた労働法、労働運動が持つ役割、機能を手にしたり、見たりできた。しかも、誇るべき友人として、わが人生の価値の証として持つことができた。その継承のための価値の発見・確認と表現が今回の特集号の質ではないか。

沖電気争議の特集で出発し、ともにルポし記録し続けたこの雑誌だからこそできることだと思うし、何よりの浅利さんへの記念号だと思う次第だ。(元労働旬報社社長・「現代ルポルタージュ研究会」顧問)

(『たたかひのルポルタージュ』13号「あとがき」2000年3月)

特筆すべきことに『たたかひと愛と、これからも』は、前半が浅利勝美さん自身の生活リアリズムにもとづく、「短編小説集」だ。

あるページに「職場のなかでのたたかひ、裁判、そして経済的苦労とさまざまあったが、子育てのうえでの苦労があまりなかったのは幸せなことだった」と書いてあった。

イクメンと呼ばれる時代には、まったく不向きな男たちの姿も描かれている。

私が書いておきたいと思った、「1960年代に社会変革をめざした、一人の生活者の人間として女性としての姿」も随所に描かれている。ぜひ御一読を。

2冊目は『俺たちの翼——巨大企業と闘った労働者の勇気と団結』(土井清著、文芸社、2003年4月)

本書は、日本航空に入社し、「長時間労働に反対し、職場の人間関係における対等性をもとめ、会社側の一方的で恣意的命令・仕事はずしなどとたたかひ、みずからの人生と労働組合の意味を描いた本」である。

土井さん(1935年生まれ)は高卒後、社会の矛盾に気がつき、人間の尊厳を目指した姿を「『沈まぬ太陽』が話題になったとき、日航労組は結成五〇年を迎える」という題して、「私の生涯の中で、四〇年前に、不当配転で強いられた釧路の生活がなければ、この歳になって高度経済成長下の企業とはなんであったのか、という問題を真剣に考えることもなかったかも知れない。もちろん労使関係について、若いころから自分なりに考えたり、日航労組の仲間たちと議論も交わしてきた。しかし自分の半生を通じて、改めてこれらの問題について考えてみようという気持ちになったのは、釧路の辛い体験が心に焼きついてきたからだ。定年になって職場を退いた後、私は組合活動の経験を生かして、賃金差別撤回闘争に関連した裁判や争議の支援を続けている。その中で私が常に耳にし、また常に自分に向かって眩いてきた言葉がある。

「企業とは一体なんだ？ 人間の可能性を破壊していくところなのか？」

これはわれわれ高度経済成長の時代に生きた世代に共通した難問にほかならない。しかし、

実際に自分たちが生きた時代がどういうものであったのかを把握するには、自分の体験を想起しながら答えを探っても、そう簡単にできることではない。抽象的な世界を具体化して理解することは、それほどたやすいことではない。まして戦後日本という時代背景が加わると、きわめて複雑な様相をはらんでくる。

私がそんなもどかしさを感じているとき、日本航空を舞台にした山崎豊子さんの小説『沈まぬ太陽』の連載が『週刊新潮』で始まった。一九九五年一月のことである。企業戦士の左遷がひとつのテーマとなった作品だったので、私はまるで自分のことのようにこの小説をむさぼり読んだ。小説の記述の中に、四〇年前の日本航空と自分の姿を探そうとしたのだと綴っている。

前書きでは、土井さんがおかれた位置（数多くの同時代に生きた労働者・サラリーマンの仲間）を次のように描いている。

「日航労組が政界・財界の猛攻を受けた一九六〇年代から七〇年代にかけて、実は他の大企業でも同じことが起こっていた。具体的な名前を挙げるなら、東京電力、雪印乳業、日立製作所、明治乳業、石川島播磨、凸版印刷など。まず労働組合活動への「インフォーマル」組織を使っ  
ての介入、組合の乗っ取り、それに屈しない者に対する貸金・昇格差別、解雇、それに配転などが労働者の上に襲いかかったのだ。これに抗して地道な反撃が開始された。そしてその闘いは現在まで続いているものもある。」

本書の柱立ては、つぎのとおりである。

## 目次

### 前書き

### 第1章 わが心の釧路

### 第2章 消えていった海岸線

### 第3章 小倉執行部の輝き

### 第4章 嵐の前夜

### 第5章 隔離政策

### 第6章 配転事件の全面勝利

### 第7章 Nの謀略

### 第8章 労働運動の攻勢

### 第9章 貸金差別撤回闘争に勝利

### 第10章 二人の経営者

### 第11章 高木社長の膿罪

### 終章 高度経済成長の光と影…

### 後書き

土井さんは「本書『俺たちの翼』は、多くの飛行機好きの仲間が日本航空に入社し、真面目に働き、低い労働条件の向上のために立ち上がった仲間たちの闘いの物語です。しかし巨大企業はその労働者たちを分断し、差別し、隔離し、苛めつくしました。でも私たちはその攻撃に負けることなく、労働組合に結集して普通に、元気に生きてきました。」と書いて本書を締めて

いる。

編集子がびっくりしたのは、「第7章 Nの謀略」だ。巨大企業における労働スパイとしての謀略か！ 映画のワン・シーミたいだ。

3冊目は、『明日へのうた——語りつぐ日立争議』（戸塚章介、大月書店、2001年12月）

著者の戸塚さん（1937年生まれ、元毎日新聞労組・新聞労連出身、元東京都労働委員会労働者委員）は、現在でもブログ「明日へのうた——労働運動は社会の米・野菜・肉だ。」で健筆を振っている。

<http://blogs.yahoo.co.jp/shosuke765>

本書の日立争議の主人公たちは「残業拒否解雇事件の田中秀幸。中研賃金昇格差別事件の一二人。男女差別事件の五人。東京賃金昇格差別事件の四人。愛知賃金昇格差別事件の三人。茨城賃金昇格差別事件の一七人。提訴外で共同要求団に加わった三二人。茨城関連会社賃金昇格差別事件の四人。関連会社の提訴外者五人。合計八一人（男女差別事件の五人中二人は中研事件と重複）」だ。

前出の浅利正さんも『民主文学』（1992年7月号）で「日立・田中裁判のあとさき」（同書所収）を描いている。

日立争議団の皆さんがどのような人たちなのか、本書では、本文中にカッコ内に出身学校を明記している。第1章「青春」、第2章「活動」から順に拾ってみた。

「中川進悟（都立北豊島工業高校卒）、塩沢正夫（都立中野工業高校卒）、日立工業専門学校、大川武宏（国分寺市立中学卒）、技能者養成所、日立武蔵女子高等学園、佐竹光生（愛知県立岡崎工業高校機械科卒業）、永井孝二（中卒、日立工業専修学校）、赤川博（北海道立穂別高等学校卒）、渡部則男（北海道立下川高校普通科卒）、馬場豊彦（福島県立平工業高校卒）、宮尾則伸（都立本所工業高校卒）、中村治郎（福島県立川俣高校機械科卒）、斉藤久男（埼玉県立秩父農工高校卒）、植木日出男（兵庫県立龍野実業高校電気科卒）、大内健次（茨城県立大子第一高等学校卒）堀啓一（山形県立酒田工業高校卒）、堀口暁子（都立武蔵高校卒）、酒井清志（長野県立長野工業高校卒）、高野勝義（埼玉県立熊谷工業高校卒）、鈴木正彦（中卒、日立工業専修学校）、真坂秀男（秋田県立矢島高等学校卒）、飯田武（日専校卒）、青田正芳（福島県立相馬高等学校卒）、井川昭雄（長崎県立長崎工業高校卒）」と。

日本の大企業は、高度成長期に全国の農村部（都市郊外エリアも含めて）から優秀な子弟を北から南から集めて、資本蓄積（会社規模の巨大化、グローバル産業としての対外進出の原資）と大量生産・大量消費の担い手を培ってきた。

その企業社会の変化・発展がひきおこす矛盾を一身に受けた世代が、上記に書かれた労働者階級の面々なのだ。だから戦後2回目の資本の苛烈なる攻撃を受けた、当事者だった。

最後のインフォーマル組織による組合活動家差別事件で、現在もたたかっている明治乳業労働者の姿と、まったく共通するものだ。

「インフォーマル組織の過去・未来」のページ

<http://e-kyodo.sakura.ne.jp/roudou/informal.htm>

明治乳業争議団員レポート記

また「日本の農村に貧困化がなくなった」と書かれた岩波新書『戦後史』（中村政則著、2005年7月）が描いた時代の前の出身者なのだ。

その後の「受験社会・競争社会の主人公」として人生を出発し、大学生15パーセントの「団塊の世代」とは、根本が違っていった。

本書では、このように語られている。

「日立争議団の多くは、一九四〇年から四五年、昭和でいうと一五年から二〇年の間に生まれている。一九四五年は日本がポツダム宣言を受諾し、連合軍側に無条件降伏した年である。これで第二次世界大戦は終息した。戦争が終わった後の数年間に生まれた世代は、成長して「団塊の世代」と呼ばれるようになったが、日立争議団はそれよりさらに若干さかのぼった世代である。

日立争議団の多くは戦争の末期に誕生し、幼年期を戦後の混乱とひもじさの中で過ごした。戦争は彼らの両親のような庶民の家庭生活を圧迫し破壊すると同時に、民主主義と個人尊重の思想を根こそぎ否定した。生活の破壊と民主主義の否定は戦争という同じ根っこから発生している。争議団員たちは幼年期に戦時体験をした最後の世代として、民主主義と個人尊重の大切さを幼い頭に刻みつけて育った。

そして彼らは教育基本法に基づいた新しい教育制度の下で小学校に入学する。四七年三月に公布された教育基本法は、前文・第一条で教育の目標を「民主的・平和的人間像」においた。さらに、教育の機会均等（第三条）、教育行政における不当な支配の排除（第一〇条）を明記した。これは主権在民をうたった新憲法の本質であり、民主主義の徹底と個人の尊重を何よりも大切にしたものであった。後に日立争議団を形成することになる彼ら少年少女たちは戦後民主教育の躍動期の中で学び、「民主主義と平和」「世人の尊重」の思想を心に根づかせて学校を卒業した

社会運動史・労働組合運動史の側面から、また会社（資本）の側の苛烈なる攻撃対象になっていった背景を、次のように語っている。

「六〇年安保闘争は、日本の大企業にとつても彼らなりに学ばされることが多かった。戦後急激に昂揚した労働運動は、二・一ゼネストの挫折、松川・三鷹などの謀略事件、レッドパージ、大型争議の鎮圧などであらかた沈静化した。労働運動の指導組織も「産別（会議一編集子）」が崩壊し、五〇年の総評誕生に見られるように反共的労使協調型労働組合が主導権を握った。経営者たちはほっと一息ついていた。

そこへ降って湧いたような六〇年安保闘争だ。息の根を止めたと思った労働運動が政治闘争化して復活した。なかでも経営者たちを震え上がらせたのが、大企業で働く青年労働者たちの台頭だった。青年労働者は高度経済成長を支える大量生産・大量消費の担い手だ。彼らが労働組合に理想を求め運動を活発化させるのは大企業の経営者にとって死活問題に思えた。

大企業の経営者は青年労働者を労働運動に駆り立てている元凶は、日本共産党とその青年組

織の民主青年同盟（民青）だと決めつけた。共産党・民青の影響力を労働組合や職場活動から排除することが労使関係の安定、ひいては企業の繁栄につながると考えた。この大企業経営者の不安に悪乗りして、共産党・民青を今にも会社をつぶし暴力革命を企てる赤鬼集団のように描き出す反共グループや労務屋が横行した。どこの会社でも競って彼らが主催する反共講座等に人を送った。そしてますます共産党・民青に対する恐怖心と敵愾心を植えつけられて帰ってきた。それは実態がデフォルメされた虚像だったが（中略）。

本書は、高度成長期、その後の社会変化の中で、一人ひとりの社会変革への願い、職場の民主化、賃金・労働条件への同権化へむけた取り組みと、会社のさまざまな「隔離・差別政策」・解雇攻撃、男女差別政策とたたかい、長期にわたる争議を経て、2000年9月に和解した姿を描いている。